

# 「すぐに網をすてて」

1月15日の礼拝メッセージを聴いて

昨年11月14日の神学校生礼拝で、神学生の稲垣真実(まこと)さんは、徴税人レビがイエスの招きに応えた場面の宣教をされた。レビはイエスの技、教え、罪の赦しの意味などがある程度聞き及んでいた。その上でイエスの招きに応じ弟子となったのかもしれない。

今日の宣教で、シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの4人の漁師たちは、イエスのことは何も知らないで、イエスの言葉に従い、即弟子になった。この点がレビの場合とは異なった。当時の漁師は、狩人と並び、自然という危険な状況下で、他の命を奪う職業であること。漁獲には高い税金と仲買人の搾取があり生活は貧しかったことを推察すれば、荒れ野の羊飼いたち同様、信仰には縁遠い、小さくされた人々であり、「アウトサイダー」だったとも言える。漁師達は、「わたしについて来なさい。あなたたちを人間あいての漁師にしよう」(本田哲郎訳「小さくされた人々のための福音」マルコ2:17)とのイエスの招きに、漁具も家族も捨てすぐに応じたのは何故か？

いつも自然と闘い死を賭けていた漁師達は、信仰にも縁遠い存在だったので、イエスの出現と招きに感嘆し応じた。漁師達がイエスを求めていたのか？平良牧師は、そのようにも考えられるが、むしろ、イエスが弟子を求めていたのかもしれないと説いた。私は思った。漁師達がイエスを通じ、つかわした神を信じる前に、神が漁師達を覚え必要としていた。だから、イエスは漁師達を招いた。なんのために。イエスの福音を述べ伝える。神の国の到来。病気や障碍に苦しむ底辺の人への支援。その使徒となるべき者たちは宣教上不可欠だったから。

さらに私の想像。貧しく、人間としての権利を踏みにじられた人々。差別を受けていた人々。信仰に縁遠い宗教的弱者。故に底辺で生きざるを得なかった社会的弱者がイエスを圧倒的に支持していた。そうした人々と共に真実を解き明かそうとしていたことが、時の権力者の警戒、反感、敵意、迫害を受けるかもしれない、とすでにイエスは想定していたかもしれない。

さあ私たちの課題。「神のつかわしたイエスが私達を招いているなら、信頼をもって応えようと漁師達は思った。主の招きは絶対なのだから。主の招きを信ずるなら、漁師達にはもう網は入らなかった。」と平良牧師は述べた。今日の私たちの所有物とは、当時の漁師達とは比較にならない。お気に入りの楽器も、コミュニケーション用具の携帯も、情報の收受や業務処理に不可欠なパソコンも、愛する家族も、主の弟子への招きを受けたなら捨てなければいけないのか？そうではないであろう。主の招きにあずかった時、一番制御すべきは自らの不安かもしれない。平良牧師の言う、「主の招きにあずかった時に、人は神への疑い、不安…本当に守ってくれるのか、といったおそれに遭うのではないだろうか？」という解釈の方が理にかなっている。

そんな時には、『しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、誰のところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す」と主は言われた。』(エレミア1:7~8)というエレミアのこの言葉が、“おそれ“をうち砕き、主への信頼を不動のものにするであろう。私は、平良牧師の言葉をそう読みとり、信仰を深める勇気を強めることができた。

加えて、主の招きに応じるとは、今日もある、様々な人々の、様々な警戒、反感、敵意、迫害とも向き合い、しっかりと相手の主張を、非暴力で聴き、その真実を解き明かしていくことも含むのではないかと、私は思った。